

後で、カルカッタ国立博物館へ出かけた時、じつとこれを見ていた一行のひとり、「もう告別がお済みでしたら出発いたしまアす」といったとたんに、目のトラックがゴミを満載して出て行った。

ナントモカントモ、ウヤウヤシイみたいでございました。

ああそうそう、ついでにちよつと伺っておきたいんですが、前に牛の糞が方々に乾してあるといいましたネ。それは一体なんのためにするんです——。

ああ、あれですか。あれはインド人の生活必需品、お台所の燃料なんです。聖獣として貴重な牛が、尻のあから人間に与えて下さるカロリーの高い歴史的燃料だということです。

つまりヤケクソかって……。イヤイヤとんでもないゴーホリという名称のコーライトのようなものと思えばよいでしょう。

そうと判つてからの一行の中には、ホテルの朝のトーストパンを心配そうに嗅いで、食べなくなつちやつた人もいたが、外国人などには勿体なくて使つてくれなにか聞きました。

カルカッタ二日の滞在中の大きな収穫は、何といつても国立博物館の見学であった。どうも日本人の概念で、博物館というシーンとした公園のような環境にでもありそうに思うのが、カルカッタ博物館は電車通りを隔てて、公園のような広場にこそあるが、街の中で電車、バス、何でも前を通る道路に面して、門も何もなくちよつとした大商館かなにかに入るようなぐあいに、三、四段の石段を登つて往来からいきなり入つてしまふという気やすさ。そして無料。あとで聞くところによると有料の日もあるという話ですからご油断なく。ただの日のせいか博物館のような場所としては、市民がたくさん見ていた。

百坪あまりの中庭に草木があり池があつて、四方が陳列室、正面から右側の各室はほとんど仏教関係の石刻美術、この中に有名なアシヨカ王石柱柱頭のライオンや古い欄楯が入口に近く置かれ、次いで釈尊

に類するレリーフのような建築部分の石刻から、仏・菩薩の造像群の列品、奥の方にヒンズー教のシバ神その他の像もあり、左方の各室は自然科学の鉱物、化石、草木、動物などがぎつしり陳べられている。

美術書などで喧伝されている釈迦伝のレリーフ類が、実はほとんど小さな石造品であつたのが意外だつたこと。紀元前二世紀よりも前というパールハットの石の門柱や欄楯が、美しく雄渾なのに吸いよせられたように、すっかり魅了されてしまったこと。入口からまっすぐアシヨカ王の作つた石柱頭部につかる陳列の仕方は全く心にくいばかりで、時間が足りないといふコボシながら、引率されるように引きずり出されてしまった。

女性をモデルとした菩薩像などの儀軌と相違しているおもしろさ不思議さ、一週間ばかりここで勉強していたいほどの魅力があつた。いやア、本当。別に女性像のせいではありません。厳肅な密教の儀軌と対比して古い菩薩像は随分人間的であることに驚いたのです。

この日は夕方、大菩提会歓迎のお茶の会があるので、車をとばしてカルカッタ大学の附近を廻つて同会へ行く。大学は四階建てで汚いが堅牢な作りで、やはり街路から直接とび込めるような作り方。この周辺は古本屋古本屋——。まわりの横丁、路地、古本屋ばかり。太い竹の柱にテントのような屋根、堀のようにギッシリと書籍をたて並べて店番がひとりづついる。そしてこれを見ているいろいろの学生の群れ、半野天みたいな店構えの安直さには驚くが、学問の街の風景の好もしさ、同行のS君を煩してこの景観をわざわざ撮影してもらつたくらいである。

大菩提会は、この古本屋群のすぐそばにあつて、規模はさして大きくもないが、講堂礼拝室、図書室、来賓室それに管理人の住居に事務室厨房などのある整つたもので、入口正面の左上に大きく創立者タルマ・パーラーの半身図が掲げられている。

つい先ごろこのタルマ・パーラーの生誕百年を記念する行事が、日印その他仏教関係者によつて盛大に行われたのであつた。(つづく)